



# にれのき

2003年5月号

特集

## 中学部まとめの実践

私たちが3年生は、今日エルム中学部を卒業します。  
私たちがここまで来れたのは、たくさんの人たちのおかげ。  
エルムに通わせてくれたお父さんお母さんへ……。

私たちは、エルムに在る間に、いろいろなことを考えました。  
自分について、命について、生きていくことの意味、  
生きている意味について考えました。  
何が本当なのかについて考えました。  
とことん考えました。  
自分には何ができるか……。  
自分は何がしたいか……。  
自分の夢は何なのか……。

まだ全てが分かった訳じゃないけど、「本当の自分」が少し見えてきました。  
エルム以外で、こんなことについて考える場所はありませんでした。  
もし、エルムに通わずにいたら、このことを考えていなかったら、  
何でも適当にごまかしたり、ダラダラ生きていったと思います。  
だから、私たちがエルムに通わせてくれて、本当にありがとうございます。  
お父さん、お母さん、ありがとうございます。

私たちは、まだまだ手のかかる子どもです。  
これからは、手よりお金の方がかかるかも。  
高校へは、みんなそれぞれの思いで行きます。  
自分で決めた道をまっすぐ進んでいくこと。  
それが今の私たちにできる親孝行。  
だから、しっかりと見ていてください。道に迷ったときのためにも。  
そのときは、できれば迎えに来てほしいです。  
私たちにとって、そういう場所であってほしいです。

上の文章は、中学部卒業生が卒業とまとめの集いのなかで父母に向けて読み上げた文章です。普段、言動には表れてこない子どもたちの精一杯の感謝が込められています。

こわして、またつくる。  
今までの自分、そしてこれからの自分



▲ 3月15日に開催された中学部卒業とまとめの集いで3年生集合写真

# 私 を見つめ直す

中学部卒業とまとめの文集から

早いもので、今年もまた中学三年生がエルム中学部を卒業していきました。この一年間を振り返ってみると、この時代の閉塞感のなかで子どもたちがぶつかった壁、そして、そこから私たち教員に突きつけてきた課題はとも大きく感じたように思います。特に、「こんな時代のなかで、なぜ勉強しなきゃいけないのか……」「勉強の意味が分からない」「なぜ、高校に行かなきゃいけないのか……」「今まで通用してきた論理はいよいよ破綻し、社会の先の見えなさからくる「行き詰まり感」が、子どもたちの「進路観」や「学習観」における「新しい」「揺れ」や「もがき」として、色濃くあらわれてきたというのが率直な実感です。

しかし、そういう状況だからこそ、子どもの全面的な成長と発達をめざす私たちの実践の値打ちが輝くときでもあるのだと、強く実感した一年でもありました。このような時代だからこそ、「人間らしく豊かに生き

ること」と勉強する(学ぶこと)「仲間をつくること」を結びつけることを子どもたちに強く訴えかけ、子どもたちとともに考えることを私たちは大切にしてきました。その成果もあつてか、子どもたちはもがき苦しみながらも、自分と向き合い、仲間とともにそれぞれの進路を力強く切り拓いていきました。

中学部の卒業にあたり、子どもたちは「まとめの授業」のなかで、これまでの自分をもう一度見つめ直していきました。エルムの中で、自分が何を学びとり、どう成長したのか。エルムは自分にとってどういう場所だったのか。そして、これから何を大切にして生きていくのか……。そして、素敵なまとめの作文を綴ってくれました。一人ひとりが、自分と真剣に向き合い、仲間と言葉を交わしながら、自分自身の思いを一つひとつ確認し、書き上げた作品です。子どもたちは、自分の思いを綴ることを通して、自分自身に確信を深め、

またひとまわり成長して、中学部を卒業していきました。  
 私たち教員も、そんな子どもたちの言葉と姿に励まされて、エルムのもつ教育力をさらに発展させていこうと、決意を新たにしています。

最後に、「卒業とまとめの文集」から、新しい一步を踏み出した子どもたちの作文をいくつか紹介します。ぜひお読みください。

中学部主任

坂口 大(さかぐち だい)

分の心の中にためこんだ。そして、ときには泣いたこともある。(もちろん自分の部屋で……。)だから苦しかったし、信じられる本当の友だちってというのが欲しかった。

## 間違い

鈴木 翔太

オレは今まで、学校の話し合いのとき、何もしゃべらず、人まかせで、



▶高校生から卒業生へのメッセージ

言いたいことは誰かが言うだろうか  
 から「いいや」って思ってた。なぜこ  
 う思ってたのかわからないと、前から  
 何か言うとか冷やかされたり、間違っ  
 たことするとマネされたり、笑われ  
 たりするから、心のどこかにストッ  
 パーみたいのがかかってたんだと思  
 う。だから何も言わず、みんなに合  
 わせてきたんだと思う。冷やかされ  
 るのが嫌だから。運動会の言葉の練  
 習してるときだって、うまくいかな  
 かったりちょっと変だとすぐ笑った  
 りする。そういうことがあるから、  
 嫌になったり、やる気がなくなっ  
 て、ぼつぼりだしてしまふ。逃げ出した  
 くなるときだってたくさんあった。  
 でも、そこで自分一人の都合でやめ  
 たり、何かを言ったりしたら、また  
 冷やかされたりするし、みんなに迷  
 惑がかかるから、そういうときは、  
 何も言わず、誰にも言わないで、自

言いたいことは誰かが言うだろうか  
 から「いいや」って思ってた。なぜこ  
 う思ってたのかわからないと、前から  
 何か言うとか冷やかされたり、間違っ  
 たことするとマネされたり、笑われ  
 たりするから、心のどこかにストッ  
 パーみたいのがかかってたんだと思  
 う。だから何も言わず、みんなに合  
 わせてきたんだと思う。冷やかされ  
 るのが嫌だから。運動会の言葉の練  
 習してるときだって、うまくいかな  
 かったりちょっと変だとすぐ笑った  
 りする。そういうことがあるから、  
 嫌になったり、やる気がなくなっ  
 て、ぼつぼりだしてしまふ。逃げ出した  
 くなるときだってたくさんあった。  
 でも、そこで自分一人の都合でやめ  
 たり、何かを言ったりしたら、また  
 冷やかされたりするし、みんなに迷  
 惑がかかるから、そういうときは、  
 何も言わず、誰にも言わないで、自

ど、見つけ出して必ず克服したいと  
 思う。  
 これからも、学校とか社会に出て  
 からも、たくさんのお話し合いがある  
 と思う。そういうときに、エルムで  
 たくさん話した結果をもとにして、  
 苦しいことや、悔しいこと、悲しい  
 ことがあっても、乗り越えていこう  
 と思う。オレをこんな風に変えてく  
 れたエルムの教員、そして、3Aの  
 みんな本当にありがとう。これから  
 は、くじけずにがんばっていきそ  
 うです。



▲クラス発表を真剣な表情で聞く子どもたち

すずき しょうた

## 後悔と感謝

福沢 裕介

僕は中一でエルムに入った。緊張していたせいもあってか、最初はエルムになじめなかった。教員も生徒もみんなテンションが高かった。けど少しずつ慣れていった。同じクラスのヒロシだけでなく、猛人や嶺太たちとも仲良くなった。僕は部活に入っていた。かなり部活に打ちこんでいた。だからエルムの行事があつてもずっと部活優先の生活をしてきた。

二年になってまた合宿の時期になった。ヒロシやもりつちよが「みんなで行こう」と言ってきた。教員も誘ってきた。けど一番熱心に誘ってきたのは三年の市毛だった。僕にとっては意外だった。僕はみんな何かをすることが好きではないからエルムの合宿には絶対行かないと決めていた。けど市毛が真剣に誘ってきて、その心が揺らいだ。少し悩んだ。けどすぐに行かないことを決めた。合宿に行かないことをエルムに言った。エルムは合宿ムー

ドになって後ろめたい気持ちになった。みんなこんながんばっているところを見て、「僕はこのままでいいの？」と自分に問いかけた。けど自分と向きあうのがこわかった。このとき、「合宿に行かないのは自分だけだ」とわかった。「いっしょに合宿に行こうよ」「なんで合宿に行かないの？」と言われたりするのが嫌で、エルムに来るのが苦痛だった。結局、僕は合宿に行かなかった。

合宿後、全然しゃべらなかつたもりつちよが自分から話したり、他の人も成長したのが目に見えてわかった。みんなが輝いて見えた。うらやましかつた。でも、その中に全然変わっていない自分がいて、自分のことが嫌いになった。合宿のビデオを見せてもらうと、楽しそうに笑う場面や感動で泣く場面があつた。「行けばよかった」と後悔した。けど、この時、後悔したことも忘れて、またなんとなく過ごしていた。二年の終わりぐらいに鈴木や田島が入ってきた。この二人が入ってきたとき、初めて女子が入ってきて最初はとまどっていた。僕は人と接することが苦手な自分にとってはうれ

しいことでもあり、嫌なことでもあつた。この頃は女子と男子のグループみたいなものもあつた。僕は女子だけでなく男子とも話さなくなった時期もあつた。僕は「女子、男子関係なくみんな楽しいクラスにしたいなあ」と考えていたけど、気持ちとは逆の行動をしてしまい、誰もしゃべらなかつた。けどある日の授業を境に変わっていった。きっかけをつくつたのは鈴木と田島だつたと思う。きっかけがなにかわからないから、多分すぐくささいなことなんだと思う。少しずつ自分が変わってゆく気がした。けど基本的なところは変わってはいなかつた。

みんながまとまりかけてきたころにまた合宿がきた。僕は二年のときのことは思い出さずに行かないようにしようとしたけれども、もりつちよや大がそんな自分を止めてくれようとしてくれた。こんなに話し合ったことはないと言うぐらい話し合った。エルムの行事に参加してない自分にとって合宿はとても大きな不安を感じていた。僕は傷つくことを恐れていた。僕はその不安に負けてしまった。やっぱり行かないこと

を決意した。でも少しでもみんなといっしょに何かしたくて自分のできることをさがした。そして団旗づくりやTシャツづくりを手伝った。合宿に行く人たちの中にいても、あまり負い目を感じなかつた。むしろエルムに来るのがとても楽しく感じた。去年と全く同じはずなのに、なんでこんなにも気持ちや感じ方が違うのか。みんなには「合宿を成功させてきてほしい」と思った。「この中でなら行ってもいいかな」と思った。合宿の手伝いをしていてみんなの気持ちがバラバラだと思ってい



▶3年生の真剣なクラス発表。下級生もじっと耳を傾けます。

た。僕はみんなが合宿に行っている間、全然充実感のない日々を過ごしていた。

合宿から帰ってきたみんなは気持ち一つになっていて、とてもいい顔をしていた。エルムに入っている人たちには後悔しないように合宿に行ってほしいと思います。結局一回も合宿に行かなかった僕はみんなと成長していきたいと思った。合宿が終わったあたりから人が急激に入ってきた。二人から始まった3Tは十二人まで増えた。僕は入ってきた人たちと会話と言えそうな話じゃないけど少し自分から話すようにした。僕は自分を変えることがこんなに難しいことだなんて思わなかった。エルムに入って真剣にひとつのことを考えること、みんなを思いやる大切さや仲間の大切さに気づいた。こんなことは他の人から見れば当たり前なのかもしれないが自分にとってはとても大きな一歩だと思う。

最後に苦しいこと、辛いこともあったけどそれ以上に楽しいことや大切なことに気づかせてくれたエルム。本当にありがとう。

ふくざわ ゆうすけ

# いつもエルムがいた……

エルムの実践は、常に保護者とともにあります。それは、子どもたちはエルムだけで生きているのではなく、地域や社会、そして何よりも家庭とのかかわりのなかで生きるべきだと考えるからです。あるお父さんから、素敵な文章が寄せられたので紹介したいと思います。

中3卒業生父  
犬山 重威

この三月、幾つかの紆余曲折を経て息子は希望した大崎高校の定時制へと進んだ。彼が自分で決めたこれまでの最大の決断かもしれない。高校進学は今の時代では当然の選択で

高校へ行くことは当たり前になっていく中、彼にとっては当然の選択ではなく苦汁の選択だった。何故中学と同じような生活をまた続けなければいけないのか？……と。

息子もその姉も通った中学は、家から5分程度の近くにありながら親としてはあまり接する機会がなかった。姉も弟も小学校で精一杯手をかけてくれたこともあり、また、仕事の忙しさにかまけて無関心を装っていたため、中学は遠い存在だった。息子のことで初めて中学を訪れたのは三年生の秋だった。授業が成り立たずクラスにも問題が大きくなっていくという理由でクラスの父母全員に召集がかかった時だ。小学校の時はよく呼び出しを受けていたので久々に血が騒ぐというか胸が躍



▶まとめの集いでの父母の発表。右端が文章を寄せてくれた犬山さん。

る思いで出かけた(変な親?)。一人の暴力的な生徒が原因でクラスが混乱しているという話があり、その子の父親が懺悔するかのよう直謝りしていた。その傍らで担任の教師が僕の時代はこうだった、と体験を語り出したが場にそぐわないピンとはずれの話に「ああ、この教師は自分しか語れないからクラスが荒れるんだ」と直感した。この教師とはその後家庭訪問で一度会い、三度目の対面は進学問題が大詰めに来ていた三年生の二期の終わりの頃の三者面談の時であった。開口一番「この頃クラスでの態度が悪くこの調子では高校は難しい」と予想通りの切り出しに、「なぜ高校へ行くかが本人に落ちてないからですね。みんなが頑張っているんだからとか、も

う三年生なんだからとか外在的な理由でいくら駆り立ててもこの子には伝わらない」とのやりとりをししばらく続けたがいつまでも接点はなかった。色んな物差で子どもを否定しようとする教師と子どもの中の物差で子どもを肯定する親とでは議論がみ合うはずがなかった。そんなことがあってしばらくの後、息子が学校を抜け出して数人で公園へ行っていた事件がありここぞとばかりに呼び出しを受けた。この時の教師の言い分には驚いた。「よく駅の掲示板に貼ってありますが、対人恐怖症で人前では話せないというのがありますが息子さんも一度カウンセリングを受けては如何ですか」と。これが三年間担任をしてきてしかも三年間部活の顧問までしてきた教師がその教え子とコミュニケーションを取れないことの原因をこう結論づけたのだ。確かに息子は表現力のある方でもなければ人付き合いも器用な方ではないが、本当にそういうことなのか、その原因を一度でいいから教師自身に戻して欲しかった。子どもの問題を一度でいいから自分の問題に置き換えて自分自身に突きつけて欲しかった。この教師は決して悪意に

満ちた教師ではなくむしろ良心的な教師であると思うが、価値観が崩壊し社会の発展方向に未来を描きずらくなった今の時代に生きる子供たちに、だからこそ本当の自分なりの未来を描くチャンスなんだと見て取れず、相変わらず「べき論」でしか対応できない惨めな教師の現実そのもので、今の教育の貧困の象徴的な光景だと強く感ぜずにはいられなかった。「いつまでも子どものせいにしてないでたまには問題を自分に返して見なよ！少しは違うものが見えてく



▶3年立会クラスの発表。自分たちの思いを自分たちの言葉で伝えます。

るはずだ」と大声で叫びたいほど公教育は疲弊している。状況把握する力量もなければむしやらな情熱もない。ああ、教師つてやっぱり聖職だし適性がない者がやるのは犯罪的であるとする思ってしまう。反面教師だけでは悲しすぎる。

こんな状況の中、実は親も悩んでおり子どもを理解してはいても現実はどう対処していいかが分からずにいた。そのとき、息子の気が済むまで付き合い、話し合い、高校を見学しに連れて行ってくれたのがエルムの先生だった。これって塾の範疇じゃないよなと、一方では全く機能しない公教育の現状と比較しながら、どうしてここまでやれるのか、子どもに内在していくその姿勢、迫力に今では滅多にお目にかかれなくなった本場の教育現場を見たような思いで一杯になった。エルムの真骨頂は子どもを見る視線にあり、子どもに対して絶対的な信頼を持っている点だと思ふ。親でも、いや、親だからこそ？挫けてしまう子どもの否定的な側面を決して悲観しないし、答えを急がないし、必ず変わる、伝わる、動き出すという大きな自信を教師達が持っている。それも仏様

の境地ではなく日々の葛藤の中から培ってきている強さを感じる。どうやってここまで辿り着いたんだ。まだ若い教師ばかりじゃないか。本当に謎の集団だ、エルムは！息子は中学生生活の三年間エルムでお世話になった。山の尾根を駆け落ちそうになった三年間を支えてくれたのがエルムだった。どう生きるかを絶えず問いかけてくれたのがエルムだった。迷いながら、つまづきながら歩いてきた道にいつもエルムがいた。親が挫けそうになるときにエルムがいた。そんなエルムが、いつか公教育に取って代わる時代が来る。部分的にはもう決着している。エルムとエルムのような集団が増えていけば、子どもたちはまた生き返ってくる。そういう強い確信を息子を通してエルムから与えられた。

エルムでは、まよめの授業で作成した文集を無料で配布しています。ご連絡いただければすぐに送付させていただきます。なお、文集は中学部のほかに屋間部、小学部の特別力リキュラム報告集もあります。

# 卒業とまよめの集い

## 中学部の一年を振り返る

三月十五日(土)、中学部の「卒業とまよめの集い」を行いました。エルムでは、毎年この時期に子どもたちが一年間をふり返って、今までの自分を見つめ、自分や仲間の成長を確認しあい、これからの自分達の目標を話し合う「まよめの授業」を行ってきました。そして、子どもたちが「まよめの授業」で話し合ったことをもとに、「卒業とまよめの集い」で各クラスの発表が行われます。

トップバッターは、一・二年生。劇という形でクラスのまよめを発表するクラスもあり、断髪式というユニークな形でこれからの意気込みを発表するクラスもありました。

そして、三年生の発表では、ひとりひとりが、「今までの自分」を見つめて、「これからの自分」を語り、エルムで学んだことを発表してくれました。教員や父母の方たちはもちろん、一・二年生たちにとっても「す

ごい」と思える、「かつこいい」発表でした。来年からの中学部を創っていく後輩たちにしつかりとバトンが渡されたな、と感じました。

その後、卒業生へのプレゼントとして、エルムでの一年間をまよめた映像を流しました。これは生徒、教員、そして父母の方々たいへん好評でした。子どもたちが生き生きとしている姿や真剣に悩んでいる姿、感動で涙に濡れた顔など、一年間の子どもたちの高まりや成長がそのまま伝わってくるものでした。

父母の方々からも、子どもたちに思いを込めた歌、「贈る言葉」を送っていたいただきました。

続いて教員からも、「ケサラ」の合唱と三年生の担任からのメッセージを送りました。これからもあきらめることなく力強く生きていってほしいという、担任の教員からの最後のメッセージを、子どもたちもしっ

かりと受け止めて、会場全体に熱い感動を呼び起こしました。

最後に、卒業生から、一・二年生、教員、そして父母の方々へのメッセージがありました。迷いながらも自分たちの道を切り拓いていくんだという子どもたちからのメッセージ。子どもたちが一人の大人へと成長していく、その現場に立ち会えたような感動的な時間でした。



▶ 荏原教室(上)・立会教室(下)、それぞれの子どもたち。自分を見つめ、これからの決意を胸に秘めた子どもたちの顔は、今までのどんなときよりも晴れやかでした。

卒業生に贈るビデオは、ご希望の方に有料で販売しています。約20分の内容で、夏合宿やスポーツ大会、受験間近の子どもたちの姿など、エルムの実践内容がコンパクトにまとめられています。ぜひご注文ください。1本2,000円です。

# 若手教員の「エルムエッセイ」

第2回

大谷 志帆 (小学部)



私がエルムにかかわり本

によかったと思うのは、本物の「子どもがまん中の教育」に触れることができたことです。特に2・3月のまとめの時期に、小学部のまとめの会にあたる「ホップ・ステップ・ジャンプ」(以下、H S J)や昼間部のまとめの話し合いに参加して、そのことを強く感じました。

小学部のH S Jは、この半年間の特別カリキュラムの報告会です。その会はとても温かく、とても自由で、本当に楽しい企画でした。どの班も、これまで自分たちが特カリでやってきたことを思いっきり楽しそうに、そして誇らしげに発表しました。一人ひとりから、自分たちがやってきたことに関しては誰にも負けないという、プロ意識にも似た自信を感じました。

そうした姿を父母や教員がとてもやさしい眼差しで見つめていて、本当に温かい空間でした。小学生全員が参加できなかったのは心の底から残念だったけれど、こういうH S Jを創り出すことができるエルムは、本当に素敵だと思いました。

昼間部の話し合いは、「今の昼間部はやらされている気がする。自分たちで創っている感じがしない」という生徒の声が発端でした。生徒も教員も全員集まって、「どういう昼間部にしていきたいのか、どういう仲間になっていきたいのか」と毎日毎日、真剣に話し合いをしました。「本当に信頼できる仲間になりたい」という思いから、「みんなのことを本当に信頼してるの?」と問いかける子、それに対して今まで話せていなかった気持ちや、心の底からしぼりだすように語る子もいました。そういう話を繰り返していく中で、今までにはつくることができなかつた最高の仲間関係を築いていけたと思います。私は、ここまで頑張った生徒は本当に

すごいと思いました。そして、生徒の声をしっかりと受け止めて、どうしたら残された時間で最高の昼間部を創ることができるか追求したエルムの教員集団も本当にすごいと思いました。生徒達と格闘しながら絶対に妥協しない姿勢を学び、生徒と一から創り上げていく面白さを知りました。その中で生徒がたくましく成長していく姿も目の当たりにして感動しました。

エルムは、一人ひとりの子どもたちの心に、充実感や達成感や一体感や自己肯定感を深く深く刻み込むために、全力投球で頑張るところです。迷ったり、ときには失敗することもあるけれど、絶対に妥協はしません。失敗も巻き返して最後の最後には逆転できるように、必死で頑張ります。これが本物の「子どもがまんなかの教育」なのだろうと思います。教員にとつては厳しくつらいものもあるけれど、私は本物を知ることができてよかつたです。今年も、そういう熱い教育観を私自身のものにしていきたいと思っています。

## 生徒募集のお願い

新学期が開講しましたが、まだ各クラス若干名の空きが出ています。今号でも紹介しましたように、エルムの実践での一人ひとりの子どもの成長は、それを支える集団の力に依拠しています。一人でも多くの子ども、そして保護者の方々にエルムを知っていただけるよう、お知り合いの方をご紹介していただけますようお願いいたします。

発行：エルムアカデミー

品川区中延 5-6-14-2F

TEL 03-3784-5676

FAX 03-3784-5609

e-mail elm@kiwi.ne.jp

HP <http://elm.m78.com/>